

災害時 キャンプ生活選択肢

発達障害児向け研修 芸西病院

発達障害のある子どもと家族を対象とした防災研修会がこのほど、芸西村の芸西病院で開かれた。発達障害児は環境の急な変化に順応しにくく避難所生活が難しいとされており、避難生活にキャンプの活用を提案。参加者約70人はキャンプグッズに触れるなどして備えへの意識を高めた。

同病院は、発達障害児の運動発達や対人コミュニケーション育成のリハビリなどを行っており約200人が通院。2022年の災害に関する保護者アンケートで、8割が「避難所で過ごすことが難しい」と回答。解決策を探ろうと10月20日に研修会を開いた。

会では、高知医療センター「こ

ころのサポートセンター」の沢田健センター長が、発達障害児はざわつきが耐えられない、じつとしていられないなどの特徴があり「避難所生活に強いストレスを感じる」と説明。過去の災害では「自傷行為の悪化や体重の減少などさまざまな問題が起きた」とし、避難所以外にキャンプ用のテントなどを構え、落ち着ける個別空間を確保することも重要だと訴えた。

参加者は実際にテントに入ったり、ガスこんろやランタンなど災害時に役立つ用品を手にとったり。香南市の母親(44)は「子どもは多動で聴覚過敏もある。キャンプなら安心して過ごせると思う」と話した。

芸西病院リハビリテーション部の加賀野井聖二部長は「発達障害のある子は『初めて』が苦手。日頃からキャンプをして楽しい経験を積んでおくと、災害時もキャンプの延長線上だと安心して避難できるのではないか」と話した。



災害時にも使えるキャンプグッズを手取る参加者

(芸西村和食甲の芸西病院)

(石丸静香)